

⑤ マイケル・パターソン 著
森川慎也、中川映里、廣幡晴菜 訳

『図説ディケンズのロンドン案内』

(原書房)

2012年にオリンピックが開催されるロンドン。小説家ディケンズが暮らした1822年から1870年にかけて、この町の様子や人々の暮らしは現代とかけ離れていました。義務教育や年金・失業手当などの社会保障はなく、家庭内暴力や少数民族迫害を防止するような人権感覚もない、「野蛮」な時代。しかしまた、そうした社会のなかでも、貧困にあえぐ人々に住居・食料・教育の機会を提供する努力が盛んになされていたようです。

かつて「一億総中流」と言われた日本ですが、いまや貧困が深刻な社会問題です。貧困者を支えるためのセーフティネットは、はたして、ディケンズの時代のロンドンよりも充実していると言えるのでしょうか？

233.3-Pat (N.T.)

⑦ 小池昌代 著

『タタド』

(新潮社)

週末海辺のセカンドハウスに集まった50代の男女4人の一日の終わりと始まり。

海のかなかに潜り波の音が聴こえず、海水にゆられ溶けていくように4人はお互いの成分が同じであることに一日の始まりに流れる音楽に踊り気づく。『あとでまた、交代しましょう』と誰にいうこともなく発せられた言葉をきっかけに浸食していく。

詩人でもある著者、小池昌代の文章は無彩色の無声映画を観ているような感覚を与える。

2007年川端康成文学賞を受賞した本作のほか『波を待って』『45文字』を含む短編集。

913.6-Koi (C.M.)



⑥ 松本健一 著

『村上春樹：都市小説から世界文学へ』

(第三文明社)

著者の松本氏によると「都市小説」とは都会に生きる若者の孤独・他者とのつながり・男女の恋愛を描いた「小さな物語」。対する「世界文学」は戦争・革命・民族など様々な問題を背景に、人間の苦悩・欲望・愛・死といった「大きな物語」となる。副題の『都市小説から世界文学へ』は本書が村上春樹論を展開する軸であろう。

『ノルウェイの森』『ねじまき鳥クロニクル』『1Q84』の三作品を読み解きながら、村上氏が都市小説の手法で世界文学に挑戦していると、著者は述べている。

心地よい小説のはずが、社会やその時代の事件・問題・暗部が描出され、深く考えさせられたのは私だけではないのでは。村上作品を読んでいないと理解が困難ではあるが、現代の小説家の第一人者である村上春樹を知るうえでは大変参考になるであろう。

910.268-Mat (Y.S.)

⑧ ルイ＝ジャン・カルヴェ 著

砂野幸稔、今井勉、西山教行、佐野直子、中力えり 訳

『言語戦争と言語政策』

(三元社)

多言語の状況が紛争の起源となり、言語は常に変化してきました。言語学者である著者は、人間同士の紛争が言語に表れてきた経緯や言語学者によって言語が管理されてきた事実を明かした上で、言語に介入することは権力の機能と無縁でなくなるとし、民主的監視を怠らないよう訴えています。フランス社会言語学の古典としてその地位を確立し、さらに原著の出版から20年以上経過しているにもかかわらず翻訳が上梓されたのは、本書が提起する問題の普遍性ゆえと言えるでしょう。

801.03-Cal (A.U.)